

中央評論

195
〔43巻1号〕
中央大学

中央評論

■特集■
■小特集■

激動する世界と日本の課題
新入生にすすめる 国家資格試験ガイド'91



特集 激動する世界と日本の課題

中央評論

第一九五号

定価三〇〇円
(本体二九一円)

一九五号(一九九一年四月号)

一九九一年四月二〇日印刷
一九九一年四月二五日発行

有斐閣 出版案内
(定価は消費税込み)
ゆうひか

新法律学辞典

編集代表=竹内昭夫・松尾浩也・塩野 宏
A5判箱入 定価8240円



◆法令百科全書として= 総項目12,450項目に全法分野の概念・用語を網羅し、主要な旧法も項目として加えた。
◆法律学教科書として= 法律学概論・法哲学・法社会学など実定法以外の分野にも重きを置き必要項目を起こした。小項目主義による法律学辞典の決定版。

法律学小辞典 増補版

編集代表=藤木英雄・金子宏・新堂幸司 学習に必要な6500項目を収録・解説。四六判箱入 定価3296円

法学用語小辞典

編集代表=河本一郎・中野貞一郎 法学基本用語1660項目を正確・明快に解説。四六判箱入 定価1854円

●正確な条文・充実した内容=信頼の有斐閣版!

編集代表
星野英一・松尾浩也・塩野 宏

1991年版

[平成3年版]

●収録法令三二五件
●収録法令九〇三件
●六法全書
●ポット六法
●収録法令一四四件
●収録判例八六〇〇件/収録法令六七件
●四六判箱入 六九〇頁 定価二五〇〇円
●学習に実務に役立つ必要トピックを的確に選択し、正確

判例六法

中央大学図書館

50000494174

●図書目録送呈●

代田区神田神保町2-17 ☎03-3265-6811(営業部) 3264-1314(編集部)

編集兼発行者 平山令二 印刷所 株式会社 清水印刷所

発行所 東京都八王子市東中野742-1 中央大学出版部内 中央評論編集部

電話 0426-74-2352

価格の理論

〔第4版〕

G.J.スティグラ著

南部鶴彦・辰己憲一訳

A5判上製カバー付450頁

定価3502円

ミクロ経済学学習のための最良のテキスト

1982年にノーベル経済学賞を受賞したG.J.スティグラによる洗練された〈ミクロ経済学〉テキストの最新版。25年ぶりの改訂でいっそう充実し分かりやすくなった。ミクロ経済学は経済理論の成熟し安定した集大成であり、本書はその核心をとらえ明快に叙述する。読者は、著者の語り口を通して、経済理論が現実の経済現象と如何に密接にかかわっているのかを読みとり、価格の理論のもつ有効性を理解することだろう。

●主要目次●

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1 経済分析序説 | 12 独占の理論 |
| 2 価格と企業経済 | 13 寡占、カルテルおよび合併 |
| 3 消費者行動 | 14 情報の経済学 |
| 4 効用の理論 | 15 生産サービスの需要 |
| 5 供給一定下の価格形成 | 16 地代と準地代 |
| 6 生産サービスの供給 | 17 賃金の理論 |
| 7 費用と生産 | 18 所得規模の分布 |
| 8 生産: 収穫逓減 | 19 資本と利子 |
| 9 生産: 規模に対する収穫 | 20 経済と国家 |
| 10 生産と費用にかんする付論 | (付論) 基本的な数量関係ほか |
| 11 競争価格の一般理論 | ●経済学者のプロフィール |

有斐閣経済辞典

金森久雄・荒恵治郎・森口親司編
四六判箱入 定価2884円

有斐閣

経済辞典 新版

金森久雄・荒恵治郎・森口親司編



●国語辞典の経済経版= 総項目15,000語について1項目100字程度の簡潔な定義・解説を加え、日常の利用に便な辞典。
●経済の全分野を網羅= 金融辞典・貿易辞典・流通辞典などの各専門分野を総合した経済用語辞典で、複雑かつ多様化する現代経済の全体像をつかめるように工夫している。

ツボク・メイキングだったのではないかと思ひます。つまり野党やいわゆる革新勢力などが戦後憲法体制というものを、憲法の中身のなかに政治システムを分権型にしていくような努力を怠つてきたのではないかと思ひます。そして逆にこのことが中曽根政治うか。このような点について内山先生にお話をしていたきたいと思ひます。

内山先生 江川先生はだいたい私と同じ世代でございますので、おそろくいろいろな意味で怒つていらつしやるのではないかと思ひます。

佐藤先生の質問にぜひ答えさせていたこうと思ひます。まず確認しておきたいことは私たちの戦後の出発点において、少なくとも戦前と戦後が切れていたという認識作業をはつきりしてきたのだからかという疑問があります。私自身、豊かさというものを「文明開化をふくめた殖産興業、つまり富国強兵の強兵だけを抜いて、そういう明治以来の近代化路線にかなり乗つていたと思ひます」と国家目標を一致させた形で生きた。江川先生もおそらくそつたと思ひます。実は六〇年安保、大学紛争等々で出てきた問題とつたかと思ひます。

もちろん産業社会をどこへもつていくのかについては、私たちは誰も確定できない。しかしその中で繁栄する大日本ができた

編集部

随筆

すぐに役立つものは すぐに陳腐化する



中川 洋一郎
(経済学部助教授)

また、新入生を迎える春となった。新入生たちは、期待に胸をふくらませて大学に入学したのに、いざ大学の授業を受け始めると、がっかりするひとが少なからずいるという。「だつて授業が役に立たないのだもの。」と彼らはいふ。なるほど、昨今は国際化ばやりだから、読めるだけの英語ではダメなのは明明白白で、これからの若いひととは英語でちゃんとしゃべれないと出世はおぼつかない。しかも、現代が情報化時代のまっただ中とあつては、パソコンのひ

とつと操れなくては、早々に「窓際」にまで追いやられる危険さえある。

そうであるならば、学生が実用英会話とかパソコン実習のような「役に立つ」技術の修得を求めるのはよく理解できる。しかも、毎年かなりの金額の授業料を支払い、毎日かなりの時間をキャンパスで過ごす以上、大学の授業にそれを望むのも、自然なのであろう。私も、ゼミの学生たちには、「からだで覚える技術は若いうちでなきゃダメだ。外国語の修得こそ、そんな技術の最たるものなんだ。まだ間に合う。必死でやれ。TOEFL(外国人用の英語検定試験)が五五〇点とれて、パソコンに不自由しないのなら、君たちも、M商事だろうが、N証券だろうが、S銀行だろうが、どこでも楽々はいれるぞ。」などといつて、煽つてゐる。とにかく、若いときには、これらの「からだで覚える」技術の修得においてに励むと良い。頭で覚えた知識はすぐに忘れるが、からだで覚えた技術はいつまでも残る。

「からだで覚える技術は若いうちに集中的にやれ。まだ間に合う。しかし、大学生時

がつていく。そういうところで、高橋先生がおつしやつたグリーン・デモクラシーがでてくると思ひます。ただ私たちの社会では the public(公衆) という考え方もできない、国民、市民個人ではない、the public という言葉がどうもうまくつかむことができない。そこで市民社会論での市民 the public ではなく、差別やネガティブなパネによって生かされてくる、生かされなければならないという構図がみえるような気がします。

一方ポードレス他方では、このようなミニ二という二つのベクトルがありますが、日本の場合、国際化、ポードレスの方向しかみえてこない。しかももう一つ逆のベクトルがあつてこれが今度の問題が入つてくるという構図がみえるような気がします。

そうしますと江川先生がおつしやつた、われわれがいかに生かすべきかという問題になります。これはそれぞれの生き方ということになるのですが、私たちは教師ですので、学生諸君に伝えるの長いものだけは知つておこう、ということだけしかないと思ひます。あとは一人一人の生き方ということになります。

* この特集は一九九〇年十二月二十二日(出)、多摩校舎2号館4階研究所共同会議室で行なわれた、中央大学社会科学研究所主催のシンポジウムの記録を基に整理し、パネラーの先生方に若干補筆していただいたものである。

代の今が最後のチャンス。」これは真実だと本気で思つてゐる。だが、そういういつつと、学生たちを見てみると、私の考へてゐること、彼らの考へてゐることは少し違ふなど、いつも感じる。技術の修得が重要であるとしても、本当に、大学とは「役に立つ」技術の修得をするところなのか。そして、それがかなわねば不満をいだくところなのか。

企業調査をすると、日本の企業経営者たちは、従業員たちの出世の度合いについて、「大卒と高卒の待遇差はありません。そのひと次第です。」と異口同音にいう。確かに、給与の差は、学歴よりも年齢によるところが大きいように見える。しかも、経験という点では、大卒者は、四年分だけ不利である。大卒者が企業に就職するとき、高卒者はすでに四年間、その職場で働いて実務上の知識を蓄積しているからである。従つて、「役に立つ」知識という点では、高卒の方が上であらう。そして、もし、本当に「役に立つ」知識が決定的な要素ならば、高卒者の方が大卒者よりも上の地位に就くか、就かないまでも同等なパフ

オーマンズを出世競争において見せるはずである。事実、諸君が卒業後、新人として勤めた最初の給料を、同年齢の高卒者（もう四年間勤めている。）の給料と比べてみるがよい。たぶん、彼らの給料の方が上であろう。（ちなみに、これは、きわめて日本的な給与体系であり、ヨーロッパやアメリカでは、同年齢の高卒の給料が大卒の給料を上回るなどということは、ありえない。）

ただ、経営者たちと話をもうすこし続けていくと、「だけれども、やっぱり、大卒の方が上にいくことが多い」と、彼らは打ち明ける。「なぜなら、大卒者は、高卒者に比べて、新しいものに対する好奇心が旺盛で、その分勉強するからです」という。目先の「役に立つ」知識は決定的な要素ではない。いつも新しい状況の中で、どれほど勉強していけるかが大事なのである。

聖書（マタイ一四一三以下）の中に、キリストが飢えた群衆に食物を施す場面が描かれている。キリストは、彼に従ってきた五千人以上の群衆に、湖のほとりで、たった二匹の魚と五つのパンを取り出し祝福することで、人々にふんだんに食物を分け

与えたという。これは、救い主のキリストが行った奇蹟であり、キリストを信じる者には彼が神の子であることの証明となろう。キリストの伝記映画などでは必ず出てくる有名なシーンである。

だが、生来、半畳を打つのが好きな私であつてみれば、「魚を与えることがいつも最善とは限らない。」などと、茶々を入れてみたくなる。なるほど、現実にはいま飢えている群衆には、魚とパンが何よりも必要かもしれない。しかし、魚は腐りやすく、パンも日持ちがしない。だから、もしも、彼らがそれほど飢えていないのなら、彼らに与えるべきは、とうめん腹を満たすだけの魚やパンではなく、釣竿や船のほつである。釣竿や船を手に入れれば、これからはしばらくは沖に出て自分で魚を取つて暮らして飢えをしのいでいける。だから、すぐになくなる「消費財」よりも、それで食糧を手に入れられる「生産財」の方が、中期的には有益である。

しかし、魚が腐るように、釣竿や船もやがては壊れてしまう。釣竿や船が壊れて食糧獲得の道が断たれたら、そのときは本当

に飢えてしまう。従つて、長期的に最善なのは、釣竿や船の作り方（つまり、技術）を授けることである。作り方を知つていれば、何度でも釣竿や船を作ることができ、もう飢えることはないだろう。

大学生は、現在の飢えを必死で満たさねばならないような「飢えたる群衆」か。そうではあるまい。受験という目先の目的から解放された今は、シルバードと並んで「人生の充電期」であろう。大学生の四年間は人生の猶予期間であるというひともいるくらいであるから、余裕はあるはず。目先のノウハウだけを求めているのは、私には、「魚」を追い求めているように映る。せっかくの「充電期」に、目先の「魚」で満足してしまつては、本当にもつたいない。すぐに「役に立つ」ものではなく、せめて、釣竿や船程度には耐久性のある財産を獲得したい。そして、できることなら、「釣竿や船の作り方」というような、一生もつ資産を獲得したい。

だから、あえて、いう。大学の教師はイエス・キリストではない。彼らに「魚」を求めろな。

エクススの浮浪者



高橋 治男
(法学部教授)

エクス＝マルセイユ第三大学との交流協定に基づいて学生の短期留学が開始されてから今年で四年目を迎える。初年度の一八八八年には、三〇名の法学部の学生諸君が参加し、浅岡夢二、鬼頭金剛両先生が引率され、翌一九八九年には法学部と文学部の学生一八名と一緒に飯田浩三、清水睦両先生が参加された。昨一九九〇年の九月には、「鉄ちゃん」こと加賀美鉄雄先生と私が引率の任にあたり、法、文、商、理工の学生諸君二名とともに南仏の古都エクス＝アン＝プロヴァンスで約一か月を過ごしたわけである。引率の指名を受けてから

親しくしているフランス人の先生にその旨を知らせると、「エクスでの一か月は羨ましいね。あの街はとても好い街だ」という手紙をくれた。

確かに落ちつきのあるすてきな街であつた。パリとリヨンに一泊ずつして、観光バスでエクスに着くと、私たちはこの小さな古都の北部にある「フランス研究院」の寮に入り、早速部屋割りをして、前年のグループが残してくれた自炊道具の一式を受けとり、向う一か月の生活の準備にとりかかった。学生諸君は、七人ないし八人の三グループに分かれて、原則として三日間に二回ずつ夕食の自炊をする。つまり三日に一度は外食のローテーションになる。私たち教員もエクスの方生方その他の招待がない限り、自炊グループに加えてもらうことにした。寮には二四室ほどの部屋があり、わが中央大学グループのほかにも個人参加の日本人学生がいたし、ドイツ、ノルウェー、スウェーデン、アメリカなどの学生もいた。入寮者の何人かを除けば、二人部屋が原則だったから、学院の初代院長の名を冠したりユ・デ・グリエの寮には、常

時四〇人以上の学生が住んでいたのである。

到着の翌日、学生諸君はフランス語の簡単な筆記試験を受け、能力に応じてクラス分けされたが、概してわれわれ日本人は筆記試験には強いものの、聞きとることしやべることが不得意だから、授業が始まった当初、大きなショックを受けた学生もいたようである。しかし、一週目の調査期間に、何段階か下のクラスに移るなどして、参加者はみな、大むね頑張つたと言えるだろう。なかにはかなり上のクラスに配属されたのに、最後までそこでやり抜いた者もいる。

午前中はフランス語の授業で、午後は、フランスの政治機構や、詩、シャンソン、プロヴァンス地方の歴史学、さまざまな講義が組まれていたが、昨年の諸君はシャンソンの授業に参加した人たちを除けば、大部分が午後は南仏のあくまで青い空の下で自由を満喫していたらしい。

学生諸君が授業に出かけると私たち引率は、寮の掃除をしてくれるオデットおばさんの相手をして彼女の愚痴や注文を聞